



РОМАНЫ
DRAMEN
DRAMMA

Зренбурга. Алексеева
 и Пришвина

von G. Kaiser und J. und K. Čapek

di Luigi Pirandello

新 興 文 學 集



シリブ シグ
カ イ セ ル

ア クレ フー
ビ ラン デ ロル

エ レン プル
カ レチ ャク

新 潮 社 出 版



非賣品

世界文學全集(38)

新興文學集

第二十六回配本

昭和四年四月十日印刷
昭和四年四月二十日發行

翻譯者

昇米北本新藏
川村田原居
曙正喜滿津
夢夫二八人格

發行者

佐藤義亮

東京市牛込區矢來町

發行所

新潮社

電話牛込

長八八八八八
〇〇〇〇〇〇
九八七六五
番番番番番

振替東京 二三、四五〇番

東京市小石川區西戶川町 富士印刷株式會社印刷

解 説

『トラストD・E』とその作者

イリヤ・エレンブルグは數ある現代ロシア作家の中でも、特にその奇抜な想像力、雄大な構想、西歐生活に對するエンサイクロペヂヤ的知識、犀利な批評、獨特な表現に於いて、他の追隨を許さない最も優れた特色のある作家で、その名聲は單にロシアばかりでなく、遠く西歐にも響いてゐる。

彼は一八九一年、ユダヤ人の家庭に生れ、少年時代は父とモスクワで過した。なか／＼手に負へない腕白者で、別荘につけ火をしたこともある。モスクワの第一中學に入つたが、一九〇六年祕密結社に参加して、中學から放校された。その後『統一黨の二年間』といふ宣言書や論文を書き、宣傳ビラと一緒に逮捕されて、八ヶ月ばかり方々の監獄廻りをした。この頃の彼はまだ藝術や詩を輕蔑して、『資本論』第三卷を読みこなすことに努めた。それからロシア内地の流浪の旅が始まつたが、一九〇九年にはパリへ行つた。この頃から、彼は詩を書き出してゐる。この時殆ど全ヨーロッパを普く^{あまた}遍歴して廻つた。彼の作品や思想がコスモポリタンののはかうした放浪的生活から來てゐる。この放浪の間に彼は中世紀文化に非常な憧憬を持ち、本も随分讀んでゐる。やがて世界大戰が始まつた。彼は出征を望んだが採用されなかつた。飢と寒さが彼を苦しめた。彼は百スウの賃金で毎晩列車の荷物の積み込みをしてゐたが、監督に叱られて逃げだした。それから『ビルヂェーフキイ』の通信員となつて、戦線にも立つたことがある。寒さにはほとほと困り抜いてゐたから、カフェーに入り^{ひた}浸りになつてゐることが多く、自然、詩などもそこで書くやうな習慣になつてゐた。彼の創作の中に非常に屢々カフェーの雰圍氣や、様々な國民の代表者達の描寫が頗るユーモラスに生動してゐる。

のはかうした事によつて説明される。そしてまた、これが彼の多くの作品の中に見られるところの多彩な映畫的幻想的要素を創り出してゐるとも云ふことが出来る。かうして書かれたのが『前夜の詩』であつた。間もなく革命が突發した。彼はベロオストロフを経てキーエフに入つて來たが、赤白革命戰と飢餓と、ユダヤ人に對する侮辱とを危くのがれて、或る時は勞働者に詩作の手ほどきを教へ、或る時は子供芝居をやつたりして口を糊した。漸やくモスクワに辿り着いたと思ふと、彼はヴランゲリの密偵だらうと云ふ嫌疑で投獄されてしまつた。彼が友人達の盡力で放免されて『印刷の家』の「プロレタリア作家の部屋」に轉がりこんだのはそれから間もない事であつた。

一九二一年の春エレンブルグは再びフランスに出發した。だがバリーも彼自身も最早以前のやうではなかつた。然し矢張りカフエー「ロトンド」の露臺に坐つて、思ひを天空に馳せることは、彼にとつては懷かしくもありまた愉快でもあつた。彼のバリー滞在は長くはなかつた。彼は自分の追放命令の噂を聞くと、直ぐに旅券の査證無しでベルギーに飛んでしまつた。ベルギーでは最初の長篇傑作『フリオ・フレニト』(一九二一年)を書き上げた。これが當時の西歐文壇に異常なセンセーションを惹起すと、引續き『ニコライ・クルボフの生涯と破滅』(一九二二年)、『十三本のパイプ』(一九二三年)、『トラストD・E』(一九二三年)、『ジャンナ・ネイの戀』(一九二四年)、『コンミュン黨員のバイブ』(一九二五年)、『一九二五年の夏』(一九二六年)等を發表して、その度毎に世界的名聲を博した。

『トラストD・E』は、エレンブルグの小説の中でも、奇抜な構想と痛快な内容とを以つて優れた作品で、物語は主人公エンス・ポートのヨーロッパ滅亡の畫策とその實行とに終始してゐる。全體としては空想の上に築かれてゐるが、普通の空想小説とは違ひ、歴史の必然とヨーロッパ生活の體驗とに基いたもので、凡ての事件が恐ろしきまでに現實性を帯び、事實以上の興味を以つて、我々の好奇心を惹きつける。

モナコ王の落胤として和蘭のテクセル島に生れたエンス・ポートは、父親から大賭博に對する強烈な傾向を承け繼い

ただけあつて、冒險を好み、異常性に富んだ天才兒であつた。少年時代から並外れた様々な職業といろんな境遇とを通つてきたが、限らない欲求は何物にも満足することが出来ず、一躍して現代のジュビターたらんことを欲した。或る時バリーの「ティ・スタア」で顔の美しい、人參色（にんじんいろ）の前髪のあるリウジ・フラメンゴ嬢と邂逅したことが、この大冒險家を重大な決心に導いた最初の動機となつてゐる。

然しエンス・ポートは國籍を持たない一個の自由なコスモポリタンとして、原始的な漂泊兒として、何物にもその行動を束縛されなかつた。世界大戰の時にはフランスで召集されて出征したが、モスクワでは共產黨に入籍し、ブルジョア國では投機に手を出して莫大な財産を造つた。が、結局二十世紀の二十年代の老衰し頽廢し切つたヨーロッパでは、何も爲すことが出来ないのを悟つた彼は、一切の財産を支配人に譲つて、自分は飄然としてアメリカに渡つた。そして二ヶ月も経つと、「トラスト D・E」の計畫案を携へて、産業の競争上ヨーロッパを憎んでゐる鋼鐵王ジエプス、石油王の息子ハルダイリ、鑛詰王ツワイヴトの三人を説いて株主にし、自分はトラストの取締役となつた。トラストは内實ヨーロッパの滅亡を目的とする「ヨーロッパ滅亡トラスト」(「TRUST FOR THE DESTRUCTION OF EUROPE」)であるが、表面は「デトロイト土木トラスト」(「Detroit Engineering Trust」)となつて居り、上記四人の幹部の外は、現に直接事務を執つてゐる七人の社員もその正體を知ることが出来なかつた。このトラストの下には更に運命的の頭文字「D・E」を有する十七の團體が歐米各國に散在して、三百十四の代理店を支配し、一萬八千六百七十人の事務員がその下で活動してゐる。事務員の中には國王、大統領、大臣、大トラスト主、銀行家、參謀總長、各政黨首領、カルヂナル、それに惡漢さへも居た。これ等の複雑な機關が凡てエンス・ポートの紫鉛筆の動き一つで支配されてゐたが、誰一人として陰謀の本體を知つてゐるものはなかつた。斯くてヨーロッパ滅亡の計畫は一九二七年四月十一日から着手して一九四〇年八月十一日トラストの解散式に終つてゐる。この十二年の間にヨーロッパの大國が一つ、そ

の國々の歴史と自然の事情とに應じて、それと異つた方法手段で減ぼされて行く光景は、ぞつとする程物凄く描かれてゐる。これは正しく没落期に於ける現代ヨーロッパの都會文明、ブルジョア文化の最後の破滅を諷した偉大なる豫言であり、聰明なる諷刺である。

この作は從來ベルリン版とモスクワ版とが行はれてゐるが、ベルリン版を紛失したので、私はモスクワ版に據つた。所がモスクワ版にはソヴェート・ロシヤと共產黨に關する部分が數ヶ所も検閲局のために削除されてゐるのを發見したので、それ等の部分はベルリン版に據つた椎名賦君の舊譯によつて補足したことを特に斷つて置く。(昇 曙夢)

『前に立つものの影』とその作者

革命後十年間のロシヤ文學は、その前期と後期の間に明らかな一線を劃してゐる。革命に續く國內戰の直後に復興した新しきロシヤ文學は、一口に言へば、叛亂の文學であつた。革命の中から生まれ出た若き作家たちは、競うて自分自身の目まぐるしいばかり豊富な、エクセントリックな經驗を藝術的に再現しようとした。ピリニャークの『裸の一年』、イワノフのバルチザン小説などは、單に取材の異常といふ點ばかりでなく、その生々しい實感と強いエモーシオンに充ちた描寫によつて、世界文學の中に不滅の位置を占むべき意義を有するものである。この破壊と死闘の時代には、すべての作家が何等かの意味に於いて緊張し切つた、感激と昂奮に溢れた心的狀態にあつた。あるものは物凄い焔の渦卷きの中に漠然たるロマンチックな魅力を感じ、また他のものはこの革命を逸したら、虐げられた者の權利を確立することは出来ないといふ意識のもとに、死にも狂ひの努力を續けた。

しかし、數年に亙る國內戰も終りをつけて、いはゆる平和的建設の時代に入つた時、無數の目に見えぬ因果律に支配されてゐる灰色な日常生活が、國內戰の戦線に於ける敵ほど容易く征服し得られるものでない、といふことがはつ

きり分かつた。幾千年來の習慣に培はれて來た人間性と、新しいイデオロギイとの矛盾衝突は、新經濟政策の實施によつて一層複雑深刻なものとなつた。日常生活の様式が革命前と似寄つて來れば来るだけ、人の習性はそれだけ固い地盤を得て過去の方へ引き戻され、理想への接近を妨げることになる。戰國時代に人々の抱いてゐた輝かしい理想が、現實に於いて貧しい、不具な、醜い姿を取つて現れるのを見て、人々は苦い幻滅と不安を感じずにゐられなかつた。後半期のソエート文學が、概ねかうした過渡時代の苦惱と、それに打ち勝たうとする一部の人の忍耐づよい努力を、モチーフとしたものが多いのは、當然な現象と言はねばならない。殊にこの二三年來、ソエート・ロシヤの重大な社會問題となつてゐるのは、性の問題であり、愛慾の問題である。戀愛自由の原則と風紀頹廢の現實は、既に幾多の作家の筆に上されて、輕佻な意味のセンセーションを伴つたとは言へ、識者の眞面目な考慮を促しつゝある。この問題を提げて、その中で現代ソエート社會の病所弱點を根本的に點檢し考察しようとしたものが、グレイプ・アレクセーフの『前に立つものの影』である。この小説は一九二八年の二月から四月にかけて雑誌『赤い處女地』に掲載されたものであるが、發表と同時に廣い讀書層の視聽を動かして、作者の優れた才能を確認させた。その成功の目ざましさは、雑誌發表後までもなく、單行本として出版されるに先立つて、いち早く獨逸語に、續いて英語に翻譯された事によつて想像されると思ふ。

國內戰の闘士であり有爲な共產黨員である主人公のグルシユコフは、満足に平和に己れの勤務にいそしんでゐたが、同じ共產黨員であり戰友であるベレジノイの妻との秘密な遊戲的戀愛を發かれたために、その快適な暖い家庭生活は忽ち破壊された。彼は目に見えぬ絆で結ばれてゐる妻子を棄て、第二の妻と新しい共棲生活を営まうとしたが、その試みも脆く崩壊して、遂に一切のものを失つた彼は、最後の避難所を自然の懷に見出さうとする——この間に於けるグルシユコフの痛ましい苦悶を、深刻な心理解剖の筆で描き出すと同時に、アレクセーフは個人と社會、本能と理智、

感情とマルクシズムの倫理、性の解放と家庭制度、過去と未來、その他現代ロシアの悩みとなつてゐるあらゆる問題に、驚嘆すべき執拗さをもつて沈潜してゐる。

勿論、アレクセーフも偉大な革命の洗禮を受けたソエート・ロシアの作家であるから、當然理智の勝利を豫言して、革命の前途に横たはる過去の暗い影が、輝かしい未來の中に消滅するものと信じようとしてゐるが、しかし彼もインテリゲンチヤ出身の同伴者の一人であるが故に、懷疑的な氣分が行と行との間に滲み出てゐるのは、けだしやむを得ない事であらう。彼は理智をもつて革命的イデオロギイを承認しながら、内部的感覺によつて血と本能の藏する人間の眞理に愛着を感じてゐる。反省的傾向の強いインテリゲンチヤのグルシユコフを通じて、プロレタリア・イデオロギイの代表者たる百姓出の鈍重なベレジノイに、無意識的な侮蔑と憎しみを感じてゐるかの如く思はれる。かうした自己分裂に悩んでゐる彼は、彼自身の反映たるグルシユコフと共に、簡單明瞭な理論的頭腦の所有者たるローシキンとの接觸によつて、強制的に自己を矯めようと望んでゐるのではあるまいか？ 物語りの結末も、自然と原始に對する作者のインテリゲンチヤ式憧憬を暗示してゐるかの如く見える。けれどアレクセーフの反省的懷疑的態度は、作家としての彼の價値を減ずるものではない。勇ましい足どりで朗らかに進軍ラッパを鳴らして、ひたむきに理想をさして突進する藝術家の必要である如く、現實生活の足もとを凝視して、鋭い批評の目をもつて人間社會の虚偽や不正や矛盾を指示する作家も、同じ程度に於いて革命の健全なる發達に貢獻すべき筈である。

思想的内容のほか、この小説の有する特異な點は、極度にまで尖鋭された心理主義である。前半期のソエート文學は舊ロシア文學への反動として、個々の人物の心理描寫を排斥し、集團^{コレクティブ}の運動をリズムミカルに動的に表現することが、文學の最高使命になつてゐた。そのために小説戯曲には在來の意味の主人公なるものが殆どなくなつて、軍隊、工場、バルチザン、百姓一揆などが作品の主なる位置を占めることとなり、その文體も直感的暗示的な表現派の手法

が歴倒的な勢力を得たものである。しかし革命の海が岸に收まつてから、戦線の生活が個々の家庭に移り、人々の目の興味は日々の營みに集中されるやうになつたために、文學も直ちにその變化を自分の上に反映した。集團の描寫よりは個人の心理描寫がより重要な位置を占め、動的なテムボの早い文體は、次第に平調の寫實的手法に席を譲つて行つた。かうしてトルストイやドストエーフスキイ、乃至プーシキンへの復歸が目を追つて顯著な事實となりつゝある。この『前に立つものの影』は、ドストエーフスキイの承繼者の如く言はれるレオーノフよりも、心理解剖の徹底してゐるところから言つて、一步進んでゐるくらゐである。これはソエート文學の進歩とか退歩とかいふ事でなく、絶對の命令者たる時代の要求であると思ふ。

最後に作者の經歷を簡単に述べて、この不完全な解題の稿を閉ぢる事とする。グレーブ・アレクセーフは一八九二年田舎教師と女流音樂家の間に生まれた。十七歳の時すでに處女作の短篇を雜誌に發表し、十八歳の年には地方新聞の編輯をするほどの早熟さを示したが、世界大戰の勃發によつて文筆生活を中斷され、東部戦線を轉々する身となつた。それから後の彼の生涯は一つの立派な冒險小説で、この場合要求されてゐるやうに、數行の文字を以て抱擁する事は全くの不可能事である。再度の負傷、飛行兵、革命後の亡命、ムッソリーニの牢獄、南歐に於ける葡萄園の經營、伯林、最初の著書刊行、ゴリキイとの知遇、あらましかういふ經路を辿つて、遂に一九二三年ソエート文壇の人となつた。爾來彼の作品の多くは慘忍無恥な農民生活を題材としたもので、その底を流れる否定的な調子のために、マルクシストの批評家からは苦言を聞かされ勝ちであつたけれど、その力強い把握と新鮮な表現は、彼のために、才能ある作家といふ一般的定評を確信した。それから間もなく『前に立つものの影』が現れて、彼の非凡な力量をしつかりと裏書きしたのである。しかしアレクセーフの本當の仕事は無論これから先である。彼の堅固な才能と豊富な體驗は、必ずわれわれの期待を裏切らないであらう。(米川正夫)

『朝から夜中まで』とその作者

ゲオルク・カイゼルは、言ふまでもなく、表現派戯曲の驍將である。

藝術上に於ける表現主義の運動といふのは、自然主義に反抗して起つたものであつて、主觀の強調、自我の解放に力點を置いてゐる。その點、觀念的であり象徴的であるが、一面、時代の進歩的な思想に結びつかうとしたために多分に社會主義的な傾向を帯びてゐる。従つて、この表現主義の運動は、歐洲大戰當時の息苦しいばかりの混亂と動搖と無秩序のうちから生れ、大戰後十年位ゐる間に花咲いた、一つの過渡期的な藝術運動と見て差支へない。であるから、その中の或るものは没落し、或るものは時代と共に轉換し、又轉換しつゝあるのである。併し、表現派は一切の舊い藝術に對して、あまりにも叛逆的であり革命的であつたために、その藝術は、題材の選び方、物の見方、表現の技巧などに於て、曾つて見ない新しさを造り出したことも事實である。

この表現派の數多くの作家の中で、ゲオルク・カイゼルは、才能の豊かな點に於て、^{エネルギッシュ}精力的な點に於て、戯曲的構成力の優れた點に於て、たしかに群を抜いてゐる。彼は一八七八年十一月二十五日、獨逸のマアクデブルクに生れた田舎者である。父はフリイドリッヒといふ商人。彼は幼年時代を故郷の僧院で教育を受け、後、南米、伊太利、西班牙などを歩き廻つて、青春時代を過してゐる。何時頃から戯曲に筆を染めたか明かでないが、一九〇五年『校長クライスト』を發表して以來、三十篇にあまる戯曲を出し、その分量の多い點に於てたしかに壓倒的である。

彼の戯曲は、實に、多彩、多式、多面である。形式の點では、言葉を壓縮し、リズムを與へ、電報文體に近づけ、又あらゆるものを類型化し、普遍化し、抽象化し、現實的な動作と心靈的な動作との二重結合を行ふなど、眩惑的で、嶄新で、怪奇で、その技巧の變化と豐饒さは止まるところを知らない程である。内容の點では、時代のあらゆる

急迫した諸問題の間を「意識的」に出没し、彷徨し、あらゆる問題を取り上げ、それに對してあらゆる化粧と變装を與へることを惜しまない。従つて、こゝに彼の技巧の手品、思想の遊戲化が生れて來るのである。

彼の多くの戯曲は、簡潔な言葉、巧みな構成、目新しい技巧によつて、人の心をつかへずにはおかぬが、彼の中心思想は一體何處にあるのか、それは常に解き難い謎である。これは、彼が深い虛無主義者なためだらうか。近代文明が彼に限りない複雑さを反映してゐるためだらうか。彼の最高の教養が、眞實に見える程驚くべき思想の遊戲を可能にしてゐるためだらうか。それとも、彼があらゆる病的で異常な感覺と官能の中に没入してゐるためだらうか。——兎に角、彼は現代に於ける最大の戯曲的能力の所有者である事は疑ひを容れない。

『朝から夜中まで』は、彼のかうした數多くの戯曲の中の、代表作の一つに擧げる事が出來よう。この劇は、一九一六年に發表されたもので、劇の主人公は、小市民階級に屬する一人の銀行員である。この主人公が、全曲の展開の鍵を握つてゐるのであつて、他のすべての人物は、彼の助演者であり、時には彼の自我の反映となつてゐる。言ふならば、この劇は一種のモノドラマ（一人芝居）の形式をとつてゐるのである。

主人公の銀行員は、六萬マルクの大金を盗むことによつて、これまでの機械のやうな生活から解放されて、生存の意義を探し、魂のエクスタシーを求めて彷徨^{さまよ}ひ出る。家庭——自轉車競争の競技場——踊り場——最後に、救世軍の會堂。この會堂こそ、彼の魂の巡禮の總勘定所である。その正面にある懺悔臺に登つて、罪の懺悔をする一人々々の人物は、皆主人公の自我の反映的な人物であつて、この場面は、特にモノドラマの色彩が濃厚である。主人公の出納係は、六萬マルクの大金を持つてゐたのに、價值ある何物をも手に入れることが出來なかつた。そこで彼は、この金——詐欺の中で最も下劣な詐欺である金を、會堂に撒^まき散らして最後の奇蹟を求める。併し、奇蹟の代りに金を奪ひ合ふ修羅の巷が生ずる。彼は、最後に踏み止まつた一人の女に、原始的な希望を繋^{つな}ぐ。併し、女は戸口へ走つて巡査

を呼び入れ、出納係にかけられてゐる賞金を要求する。彼はあらゆる期待を裏切られ、何一つ報いられなかつた。かくて、彼は「救ひ」のないまゝに、我と我が身を撃つて倒れて行くのである。

この作は、現代に於て機械の如く働くべく運命づけられてゐる一人の小市民の悲劇である。併し彼の悩める姿は、救ひを求めて彷徨ふ永遠の巡禮である人類の、魂の悩みと哀訴の普遍的な姿ともなつてゐるのである。劇としても、テンポの早い、色彩の豊かな、技巧のうまい、好個の現代劇となつてゐる。伯林ではラインハルトの手により、紙育ではシアタ・ギルドにより、その他各都市で上演されてゐる。我が國では、築地小劇場が二回これを上演して舞臺藝術の上で一つの新生面を拓いてゐる。(北村喜八)

『六人の登場人物』とその作者

いろいろな意味に於て、世界の文化に革命を促がさずには措かなかつた大戦は、文藝、就中、演劇にも目醒ましい轉換と進出の機會を與へた。戦前、吾々が劇場で見たイブセン以後の傳統的近代劇の型を、打破し、寫實主義と感傷主義を一蹴して、ごつた返す渦巻を起した。藝術座以後の露西亞の演劇、獨逸の表現主義戯曲、中欧新興國、チエッコ、スロヴァキア、ハンガリーあたりに生れた新人の戯曲等々、目まぐるしいばかりだ。伊太利に於ける怪奇派ピランデルロの戯曲は、このメリイゴオラウンドの花形である事は言ふまでもない。

もとゞラテン系諸國、殊に伊太利の戯曲は最も傳統に崇られてゐた。丁度亞米利加に於ける英吉利のやうに、系統を同じうする先進國に佛蘭西があり、常に後塵を拜するの外なく、この『六人の登場人物』中に、作者が舞臺監督をして皮肉を言はせてゐる通りの狀態であつた。然るに一代の英傑ムッソリニが飛び出すのと前後して、突如擡頭したのがピランデルロである。ミケランジェロの伊太利、ダンテの伊太利は、未だ自然的死滅を遂げず、再生の勢で世界

の文化に先驅せんとするの意氣あるを示した。

『六人の登場人物』は、彼の作中最も傑出した代表作で、新奇な技巧と奇怪な内容とその表現の大膽なために、一九二一年の羅馬に於ける初演では賛否交々で、罵倒、應酬、果ては喧嘩暴動を惹き起したほどだが、今日では世界の各國で演出せられ、彼は世界の作家として認められ、口の悪いので有名なバアナド・ショウでさへ、推賞するに至つた。

この戯曲に用ゐられてゐる技巧の新らしきは勿論注目に値する。然し、この戯曲の眞價は、恐らく吾々の生活現象、世相に對する作者の冷やかな觀察が、根柢から信念の動き出した戦後の人心に、投下彈の如きショックを與へたところにあると言つていゝであらう。作者の創造した最も興味ある性格と、世相に對する恐ろしいほど冷酷な、獨創的な觀察との醸し出す戯曲そのものゝ持つ悲劇的威壓力、機智とユウモアのカマフラアジで彩りつゝ、現代の劇場に於ける演出を、戯曲作法上のテクニクを、皮肉に攻撃する鋭鋒は、この作家の非凡な才能を語るに十分である。「俺は書いてゐるのではない、生きてゐるのだ」と云つたこの作者の眞剣な態度は、五十歳を過ぎて始めて書き出した彼の戯曲が、過去三十年の思索と創作生活の結論である事を裏書するものである。

ルイデ・ピランデルロは、一八六七年即ち六十二年前シシリアに生れた。父は移住民として希臘から來た人の子孫で、母はその土地の生れたといふ。哲學的、宗教的な希臘思想と、南歐シシリアの熱情とをその血脈の中に藏してゐる事は、彼の作品にはつきりと表はれてゐる。初めミラノの大學に學び、後ボンの大學に轉じて言語學と哲學の學位を得て故國に歸り、一九〇七年以來羅馬の女子高師の教授として、傍ら著作をした。恐らく、ショウ、ウエルスなどと共に現代に於ける多作家の一人で、詩、小説、戯曲、評論等、合せて四百篇に近いと云はれ、過去十年間は殆んど戯曲の創作、自分の劇場である藝術座の仕事、自作の映畫監督に没頭してゐるらしい。

ピランデルロの作については世上非難の聲も可成り高く、兎角喧しく言はれる人であるが、それだけに、今では世

界の隅々にまでその名が聞え、羅馬にある彼の家は、全歐洲のインテリゲンチヤの集會所だとさへ言はれてゐる。小説は彼の作品の大部分を占め、『生けるバスカル』は最も有名である。戯曲は十篇に近い一幕物と、約二十篇の多幕物とあるが、大部分自作の小説を脚色したものである。『六人の登場人物』も「性格の悲劇」といふ小説から來たもので、この外、『ヘンリイ四世』、『各人各説』、『御意のまゝ』などが最も多く上演せられてゐる。(本田滿津二)

『蟲の生活』とその作者

チャベク兄弟——即ちヨセフ・チャベクとカレル・チャベクは、チエコ・スロワキアの劇作家であり演劇實際家である。チエコ・スロワキアは歐洲大戰後獨立した新興國である。伯林と維納とをつなぐ線上のほど中央に位するのが、この新興國の首都プラアグである。このプラアグは、古代ボヘミアの首都として歐洲では古い都の一つであり、現在は最も新しい國家の首都となつてゐるので、そこには中世の繪のやうな優雅さと、近代文明の都市としての生き生きとした活動的な精神とが、不思議な交錯を見せてゐる。従つて、そこには中世の美しい傳統の上へ、解放された國民の進歩的で活動的な空氣が漲つてゐるわけである。プラアグ市民は、この新興國としての華やかな意氣や、新しい自由な精神や、伸びゆく文化を、演劇といふ創造的な仕事を通して輝かしく示し出さうとしてゐる。かくて、現在のプラアグは、歐洲大陸でも興味深い演劇の都市となつてゐるのである。

チャベク兄弟は、このプラアグの演劇のために獻身的な努力を捧げてゐる。兄弟共に、戯曲も書けば舞臺裝置もやり、演出もする。併しこの二人のうち、弟のカレルの方がより世界的である。彼はたしか一八九〇年の生れで、伯林や巴里に遊學し、哲學博士の稱號も持つてゐる。その世界的な作品としては、科學的夢想を描いて新しい人類の出現を豫想した『人造人間(R・U・R)』や、人間の不死不老の問題を取り扱つた『マクロボウロス家の秘法』などがある。

戯曲『蟲の生活』はこの兄弟の合作になるものである。これは、昆蟲の世界に姿をかりて人間の生活——吾々の住む世界を諷刺したものであつて、それが昆蟲の假面の下にあるだけに、一層端的に露骨になつてゐる。愚溺、淫蕩、蓄財、貪婪、我慾、殺戮——さうしたものが限りなく展開され、最後に「生と死」の意味深い場面によつて結ばれてゐる。個々の人間は必ず死滅する。併し、その死滅の影には、嬰兒の泣き聲と生誕の悦びとが隠されてゐるのである。一面、怪奇で戲畫的な見世物であり、一面、明るく愉快なこの近代的メロドラマは、ブラアグのみで無く、世界各國に翻譯上演されて、チャベクの名を世界的にしてゐる。作者チャベクはこの劇に關して、次のやうに書いてゐる。

「ファブルの『昆蟲の生活』及び『昆蟲の思ひ出』の古典的作品を偶然讀んだ時に、吾々は『蟲の生活』といふ喜劇を書かうと思ひつゐた。勿論、就中興味を引いたのは、殺人的な昆蟲の種屬のことを書いた章であつた。吾々にとつて今一つの源泉と言ふべきものは、自然に對する吾々の觀察であり、久しい間の蝶の採取と蒐集であり、種々の蛹さなぎと青蟲の飼育であつた。——そして、最後に、何よりも人間自身の研究であつた。

吾々は、この喜劇が、普通の戯曲の尺度を以て測らるべきもので無いのをよく知つてゐる。これは、三幕或は四幕の一幕物であつて、浮浪人の姿と全體の觀念とに依つて結ばれてゐるものである。これは戯曲ドラマといふよりは、寧ろ、互に結びつけられた場面である。これは見世物である——昆蟲の生活並びに人間の生活の見世物である。浮浪人は、根本から見て、單に出來事を明かにする説明者の任務をもつてゐるに過ぎない。併し、劇の進行するにつれて、彼の姿は、精神的な前景に於いて、次第々々に力強くなつて來て、終にこの劇の眞の主人公——さう言つても差支へないなら——になるのである。」（北村喜八）

『アルバートフの青年時代』とその作者

ミハイル・プリシヴィンは現代のソウエート文學の中で獨自の地位を占めてゐる。彼は我々の云ふプロレタリア作家ではない、また所謂新進作家でもない。彼は今年五十六歳の老人である、しかも、彼は現代ソウエートの若き男女に愛し讀まれてゐる若々しい作家である。

プリシヴィンは一八七三年に生れた。彼はロシヤの革命的なインテリゲンチヤによくある青年時代を送つた。彼は有名なボリシェウイークであるワシリイ・ダニロウイッチ・ウリリーフの指導の下に、社會民主黨（現在の共產黨）の一グループに屬して、革命運動に従事してゐたが、後に捕へられ、リガに於いてその刑期を終つてから、ライプツヒに去つた。そこで彼は大學で農業を研究し、ロシヤに歸つてからも約一年半の間農業の實際に従事してゐた。そしてその時（一九〇四年）の記念として、大著『野及び菜園の栽培に於ける馬鈴薯』その他の論文が残された。一九〇五年に彼は永久に農業を棄て、北方に去り、そこで彼は『愕かざる小島の國』と云ふのを書いた。これが彼の文學的活動の最初である。續いて幾多の主として狩獵についての物語を書いて彼は有名になつた。

一九二三年にプリシヴィンは連作『コシチェイの鎖』と云ふ自叙傳風な小説を書き初めた。その最初の三環は、『クルイムシカ』と云ふ題で一九二四年モスクワで刊行された。コシチェイとはロシヤの童話に出て來る怪物で、その鎖をもつて罪なき處女を縛つて置くと云ふ。『コシチェイの鎖』とはつまり「自由を束縛する鎖」の意である。『クルイムシカ』は當時のロシヤに於いて好評を博した。彼も亦、これについてかう書いてゐる——「私は私の幼年、少年及び若い青年時代から一つの物語を作つた。それは小説『クルイムシカ』である。『クルイムシカ』を私は、私が書くであらうと感じてゐる人間についての本當の小説の始まりであると考へてゐる。」

續いて彼は本書に收めた『アルバートフの青年時代』（一九二六年）を書いた。これはそれ自身として獨立した小説であるが、尙彼の連作『コシチェイの鎖』の第四環を爲すものである。この作は現代ソウエート文壇に於ける彼の地位